



町民文芸

只見短歌会

十月詠草

大塚栄一

指導

体調に合はせて夫が慎ましく培ふ庭の花咲き揃ふ

古川 英子

真向ひの雑木林にこれ程も栗の木あるかと実入りて驚く

馬場 八智

名もしらぬ茸を食し何事もなきを確かめ旨みを知りぬ

小倉キミ子

久々に電車に乗れば乗客ら皆俯きてスマホに向かふ

新国由紀子

車窓より朝日に映ゆる紅葉の山並眺め診察に通ふ

関谷登美子

長雨の続きといづこも難儀せしコンバインの跡深く残れり

渡部ゆき子

くすぐれば孫の反応想像し浮き立つ思ひにねこじゃらし摘む

目黒 富子

毎日のことなれど気候の変化には惑はされテレビの予報見てゆく

渡部ヨリ子

こぶし苑に三日入所し傍らの姉との食事いつもより長し

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

十一月例会

目黒十一

指導

手に触れる越後上布や実南天

恒 夫

紅葉散る峠ここより六十里

冬麗半眼の猫まめを打つ

吉 児

一袋リンゴの里のリンゴ買う

礼

出来具合などを言い合い牛蒡掘る

ぐるぐると枯葉のごとく生きている

信

頬赤く仕舞われてゆく紫山子かな

順 子

台風一過紺碧の蒲生岳

秋うらら日向の向うひんやりと

都

新蕨のゆるく積まるる考古館

栗飯にゴマたっぷりと客を待つ

修 一

溪谷の紅葉半分切る夕日

とろろ汁家富まずして平なり

味代子

この陽射し三日ぶりなり豆稲架

年老いて昔を捨てる後の月

妻語る葱の白さの苦労かな

亀虫の捕獲仕事常となり

一 穂

日に二度の列車到着紅葉す

初氷バリバリバリと通勤車

小春日や園児の踊る白虎隊